

1年前、中学校の保健体育の学習指導要領にがん教育が明記されました。「また、がんについても取り扱うものとする」というたった一文ですが、3月末の高校の学習指導要領改訂でも、同じ文章が追加されました。これで中学、高校で子どもたちは「がん教育」をかならず受けることとなります。

日本は男性の3人に2人、女性の2人に1人が、がんになる世界トップクラスのがん大国ですが、日本人は、がんを学ぶ機会がほとんどありませんから、迷信がはびこっています。焼き肉などの焦げた部分は避ける必要もありませんし、白人と違って日本人では紫外線で皮膚がんが増える

がん社会 を診る

中川 恵一



イラスト・中村 久美

中高での「がん教育」に期待

こうした遅れの大きな原因は、国民が「がんを知らない」ことだと私は考えています。

がんの予防や早期発見は、わずかな知識の有無に左右されますし、治療法の選択はまさに「情報戦」といえるからです。きびしい言い方になりませんが、学校でがんを教えることがなかったことが、多くの不幸を生み出してきたと思います。

行われていなかったことが問題になりました。これでは保健体育ではなく「体育」です。

しかし、がん教育が中学、高校で行われるようになれば状況は変わってくるはずですが、中学は3年後、高校でも4年後から、正式に教科書にがんについてのページが加わることとなります。さらに、教科書の内容を学ぶだけでなく、医師やがん経験者が外部講師として学校に向くことも決まっています。

ことありません。アルコールで顔が赤くなる人が多い日本人では、白人と異なり、お酒は要注意です。

欧米では減少に転じているがん死亡数は日本人では増加

の二途をたどっています。い

まだ高い喫煙率と遅れる受動喫煙対策、低い検診受診率、手術偏重の治療、緩和ケアの遅れなど、課題は山積しています。

これまで、保健体育という

教科は体育分野（実技）に偏重していたと思います。一昨年も東京都の公立中学校で2年あまりも保健の授業が全く

子宮頸がんの検診は20歳から受けなければなりません。受診率は欧米、韓国の半分にとどまっています。高校でがんを習った女性が検診に行ってくれると期待しています。（東京大学病院准教授）